



around the world

イラク国民議会選挙 既得権益に挑む新党の誕生

日本エネルギー経済研究所
中東研究センター研究主幹

吉岡明子

一〇月一〇日にイラクで国民議会選挙が実施された。イラクの政界には、国民全体を包括的に代表するような政

党がなく、民族や宗派を基礎とした複数の政党が、それぞれの属性内で支持を争う構造になっている。なかでも影響力が最も大きいのはシーア派政党であり、そのなかでどの政党がより多くの議席を獲得し、新政権づくりを主導できるかが焦点となる。

しかし今回の選挙は、こうした既存政党間の権力争いとは別に、二〇一九年の反政府抗議活動から生まれた政党の参入という新しい要素があった。後に「一〇月革命」と呼ばれるようになった一九九年の大規模な抗議デモは、一向に改善しない劣悪な公共サービスや失業問題、政界に蔓延する腐敗といった政治経済の課題に対して業を煮やした若者が路上の抗議活動に訴えたもので、それを弾圧しようとした治安部隊やシーア派民兵と衝突して、半年間で六〇〇名以上が命を落とす事態となった。なお、こうした抗議デモが組織さ

れたのは、首都バグダッドの他は南部のシーア派の各都市であり、いわばシーア派コミュニティ内で、持つ者と持たざる者の分断が露になったと言える。

こうしたデモ隊からの抗議の声におされるように、二〇年五月には首相が交代し、今年一〇月に新たな選挙制度（比例代表制から中選挙区制に変更）の下で、解散総選挙が行われるに至った。それでも、政界への新規参入には資金や組織運営の面でハードルが高く、既存の政党が政界を牛耳る構造に大きな変化はないだろうと見られていた。

しかし蓋を開けてみれば、「一〇月革命」勢力から二つの政党が、九議席と六議席を獲得することに成功した。他にも、政党に属さず個人として当選した議員が三五名ほどいて、彼らも一部は「一〇月革命」勢力と連携する動きを見せている。イラク国民議会の定数は三三九であるため、彼らはごく小

な会派に過ぎない。それでも、従来、イラクの政界では挙国一致政権の名のもとで、議席を得た政党はほぼすべてが政府に参画して利権の分け前に与ることが慣習となっていたが、こうした「一〇月革命」勢力は野党になることを宣言しており、彼らが今後、イラクにおいて政治改革を進める小さな力になることが期待されている。

投票自体は、国際監視団も現地に入っ
てかなり公正な形で行われたと報じら
れた。しかし、新たに採用された中選
挙区制への対応に失敗し予想外に敗退
した政党からは、不正があったとの訴
えが続出し、いまだ選挙結果が確定し
ていない。

その最たる政党が、シーア派民兵を
傘下にもつファタハ連合である。同党
は前回選挙の四八議席（第二党）から
大幅に議席を減らし、わずか一五議席
しか獲得できなかった。一月五日に

は彼らが抗議のために動員した支持者
が治安部隊と衝突して死傷者が出る事
態となり、その二日後に発生した無人
機による首相暗殺未遂事件にも、関与
しているのではないかと疑われている。



バグダッドで選挙結果に抗議するシーア派民兵の支持者たち（ロイター／アフロ）

選挙で七三議席を獲得して第一党と
なった同じくシーア派政党のサドル派
は、カーズイミ首相の続投も視野に入
れていると報じられているため、暗殺
未遂事件はそうした動きへの警告とも
いえよう。

今回の選挙では、改革を訴え
る新党の参入という変化への兆
し、そして、武力を用いてでも
既得権益を守ろうとする民兵の
存在感という、イラク政界の二
面性が浮き彫りになった。今後
の展開としては、従来と同様に、
サドル派やファタハ連合などの
シーア派政党が妥協点を見出し、
統一の首相候補の擁立を進める
という可能性が最も高いと見ら
れる。しかし、交渉の行方は依
然として混とんとしており、新
政権の発足に至るまでには数カ
月を要するだろう。●